＜研究ノート＞

「海の民」のトポジェニー
――ソロモン諸島マライタ島北部の海上居住民ラウ／アシにおける移住伝承と集団的アイデンティティ――

里見　龍樹*

要旨

ソロモン諸島マライタ島北部に住むラウあるいは「海の民」（アシ）と呼ばれる人々は、人工島と呼ばれる独自の海上居住の形成・拡大過程を物語る一群の移住伝承をもつ。本稿ではこれらの伝承を、オーストロネシア語地域で広く見られるとされる「トポジェニー」、すなわち一連の場所・地名への言及を含む、神話的祖先や集団の移動についての語りの一事例として考察する。アシの伝承は、マライタ島内の各地に「山の民」（トロ）として居住していた諸氏族の祖先が、多様な移住の過程で海上居住を開始し、また拡大させることで、「アシ」という集団的アイデンティティを形成してきた過程を語っている。こうした過程はまた、植民地時代に入っても持続していたものと認められる。本稿では、このようなアシの移住伝承を、他地域の「トポジェニー」をしばしば特徴付ける排他的なテリトリー性や、メラネシア人類学を一面で規定してきた機能主義的な「社会統合」モデルには適合しない独自の集団性のあり方を示すものとして考察する。

キーワード：ソロモン諸島マライタ島、「海の民」ラウ／アシ、移住伝承、集団的アイデンティティ、トポジェニー

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　マライタ島北部の「海の民」ラウ／アシとその人工島居住
　１　人工島居住と「アシ」カテゴリー
　２　調査地：T 村と沖合人工島群
　３　「アシ」アイデンティティの現状と移住伝承
Ⅲ　移住と居住集団の構成：a 島の事例
Ⅳ　移住伝承の諸事例
　１　本島から人工島への移住

* 東京大学大学院総合文化研究科博士課程

２　人工島の創設、および人工島間での移住
Ⅴ　考察
１　移住伝承における（非）テリトリー性
２　移住と「社会統合」
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

本稿は、メラネシア島嶼部のソロモン諸島マライタ島 Malaita Is.北部で独自の海上居住を営んできたラウ Lau または「海の民」（アシ Asi）と呼ばれる人々に関し、その居住形態の形成過程に関わる移住伝承を民族誌的資料として報告するとともに、そうした伝承に示される、この人々における集団的アイデンティティの特質について考察を試みるものである[1]。

ここで言う集団的アイデンティティとは、①次章で紹介する特徴的な海上居住を営んできた人々が、マライタ島北部において、「海の民」というおおよそひとつの集団を構成するものと認められていること（社会集団としての同一性）、および②この人々が、「自分（たち）は『海の民』である」という自己規定をなしうること（集団カテゴリーの参照による自己同一性）、という主に 2 つの事態を指すものである。ラウ／アシの人々において語られる祖先の移住についての伝承を、本稿では、こうした意味での集団的アイデンティティの形成についての語りとして考察する。

このような視角は、フォックスがオーストロネシア語地域についての比較研究という枠組みの中で提唱した「トポジェニーtopogeny」の概念に沿うものである[Fox 1997]。フォックスは、この地域で広く見られる、一連の場所・地名への言及を含む、神話的祖先や集団の移動を主題とする歌や神話を、「場所へと結び付けられた（topo-）集団の系譜（genealogy）」の意味で「トポジェニー」と名付けている。その上で彼は、そうした歌や神話が、オセアニア・東南アジア島嶼部の各地において、社会的・集団的秩序の形成を記憶し説明する役割を果たしていることに注目し、同様な関心に基づく多数の報告を比較民族誌的な論集[Fox 1997]にまとめている[2]。

フォックスの提唱による「トポジェニー」の概念はこの後、本稿と同じメラネシア島嶼地域についての研究でも、しばしばキーワードとして採用されてきた[e.g. Scott 2007;

[1] 本稿は、2008 年 3～4 月、2008 年 8 月～2009 年 1 月、2009 年 4～10 月の合計約 11.5 か月（マライタ島のみで 10 か月）に渡り、マライタ島北部およびマライタ州都アウキ Auki、ソロモン諸島国首都ホニアラ Honiara で行った調査に基づくものである。また、以下のⅢ・Ⅳ章で示す伝承はいずれも、調査期間後半の 2009 年 4～10 月、現地語（ラウ語）を用いて行った聞き取りに依拠している。

[2] フォックスによるこの論集には、その後事実上の続編[Reuter 2006]が編まれている。

Mondragón 2009]。また、同様な神話・伝承は、メラネシアの非オーストロネシア語地域に関しても指摘され、比較研究の対象となされている[e.g. Rumsey and Weiner 2001]。これらは、移住と集団的アイデンティティ形成についての語りとしての「トポジェニー」への比較民族誌的な関心が、近年のオセアニア／メラネシア地域研究において一定の位置を占めるに至っていることを示すものと思われる。

本稿Ⅲ・Ⅳ章で見るように、オーストロネシア語系のラウ／アシにおける移住伝承は、フォックスの言う「トポジェニー」の類型におおよそ合致するものであり、人々の空間的移動が同時に集団的アイデンティティの変化・動態をも構成するという、二重の意味での「運動」についての語りをなすものと見ることができる。本稿は、独自の海上居住を営んできたラウ／アシにおける移住伝承の事例を報告することにより、「トポジェニー」をめぐる近年の比較民族誌的な関心に貢献しようとするものである。

他方、フォックスの「トポジェニー」論は、場所や移動に関する神話的な語りが、現存の社会秩序や権力関係を正統化するものとして機能するという、神話・伝承に対する政治的・イデオロギー論的な分析にも親和的な面をもっている[e.g. Pannel 1996]。マリノフスキー流の「社会の憲章」としての神話という機能主義的な見方にも近いこうした視点は、現代のメラネシア地域に関する限り、たとえば天然資源開発などに際し、慣習的土地権を主張するために人々が系譜や伝承を「操作」・「改変」しているといった、功利主義的かつ時に還元主義的な分析をも導きうる。

マライタ島北部のラウ／アシにおける「トポジェニー」としての移住伝承は、そこで語られる集団的アイデンティティのあり方（Ⅳ・Ⅴ章参照）においても、そうした伝承やアイデンティティを人々が現在受容し経験する仕方（Ⅱ章の３参照）においても、神話を通じた社会秩序のイデオロギー的正統化、あるいは政治的・経済的な利害関心に基づく伝承の操作といった分析に対し、あくまで不適合であるように思われる。以下で見るように、ラウ／アシにおける移住伝承は総体として、人々が、独自の海上居住をともに営むことを通じて、「海の民」というアイデンティティを漸進的に獲得する――言うなれば「海の民」になる――という変化・生成の過程について語るものとなっている。そしてそこに見出される集団のあり方は、通常の「トポジェニー」がその「起源」を語るような、土地との結び付きによって排他的に境界付けられ同一化された集団とは、いくつもの点において異質であるように思われるのである。

しかも、次章で述べるように、現在のマライタ島では、「海の民」という集団的アイデンティティに潜在的ながら根本的な変化が生じつつあり、ラウ／アシの人々はこのアイデンティティを、ある種不安定なものとして経験しているように見える。本稿におけるラウ／アシの「トポジェニー」についての考察は、この人々におけるこうした現状について考える上でも不可欠な前提をなすものである。

Ⅱ　マライタ島北部の「海の民」ラウ／アシとその人工島居住

1　人工島居住と「アシ」カテゴリー

マライタ島（後掲図 1 参照）は、ニューギニア島の東に広がるソロモン諸島を構成する島々のひとつであり、同島には現在、10～12 の異なる言語集団に属する約 12.2 万（1999 年時点）[Statistics Office c.2000]の人々が居住している。そのうち 5 つ前後の言語集団が分布し、とくに人口密度の高いマライタ島北部では、居住地と生業のおおよその違いに基づき、人々が自他を「海の民 *Too 'i asi*／山の民 *Too 'i tolo*」――日常的には、単に「海／山地」を意味する「アシ／トロ Tolo」の略称が用いられる――に区別してきたことが知られている[3]。このうち、マライタ島北東海岸部および海上に居住する、これまでの文献で「ラウ」と呼ばれてきた人々は、同じく「海の民」とみなされる同島中西岸のランガランガ Langalanga と並び、発達した漁撈技術をもつ漁撈・交易民として知られるとともに、「人工島 artificial islands」として紹介されてきた独自の海上居住を営んできた[4]。

現地語では *fera 'i asi*（海の村、海にある住みか）――動詞的には *too 'i asi*（海に住む）――と呼ばれるこの海上居住の形態は、マライタ島北東岸に沿って南北 30 ㎞以上に渡り細長く広がる、今日ラウ・ラグーン Lau Lagoon と呼ばれるサンゴ礁内に、海底で採取される岩石状のサンゴの砕片を積み上げて島を築いたものである。現在この地域には、居住人口数百人からわずか 1 家族までという大小の規模をもつこうした人工の島が、2009 年 9 月時点で筆者が試みた計数によれば 94 個前後――うち、現在人が居住しているものが 79、無人になっているものが 15――分布しており、人々はこれらの上に、多くの場合サゴヤシの葉を編み上げた住居を構えて居住している[5]。このような居住形態は、筆者のこれまでの

---

[3] 本稿での現地語のアルファベット表記は、C. E. フォックスによるラウ語辞書[Fox 1974]に基本的に従いつつ、煩雑な記号表記を避けるため、長母音を *aa*、*oo* というように母音を 2 つ連ねて表すという変更を加えた。なお、マライタ島北部の言語集団としては、ファタレカ Fataleka、トアバイタ To'abaita、バエレレア Baelelea、バエグ Baegu が「トロ」に、本稿で取り上げるラウが「アシ」に分類される。

[4] トライオンとハックマンは、1980 年代初頭の時点で、マライタ島南部の「飛び地」も含めたラウ語の話者数を 6500 人と推定している[Tryon and Hackman 1983: 21]。ラウの人々については、①1927 年、英国国教会の宣教師らとともにマライタ島北部に滞在したアイヴェンズによる報告[Ivens 1978 (1930)]の後、②人工島居住の成立に関するパーソンソンの考古学的・伝播論的な議論[Parsonson 1966]、③主に 60 年代末の滞在・調査に基づくマランダとケンゲス＝マランダの一連の象徴人類学的な研究[Maranda and Köngäs Maranda 1970; Köngäs Maranda 1975; Maranda 2001]、加えて④秋道による生態人類学的な研究[秋道 1976; Akimichi 1991]がある。また⑤竹川[2002]は、マライタ島南部に「飛び地」のように存在するラウ語話者の居住地を調査し、これに関連する移住史についても述べている。

[5] パーソンソンは、ラウ・ラグーンにおける最古の人工島の建設を 18 世紀と推定している[Parsonson 1966: 5]。こうした居住形態の形成動機として、これまでの文献では主に、①植民地時代以前のマライタ島で一般的であった集団間戦闘における防衛の目的で、②漁撈や交易活動上の便宜のため、③マラリアを媒介する蚊を逃れるため、といった説明が提示されてきた[Ivens 1978(1930); Parsonson 1966]。

調査・研究から、この地域の西洋世界との継続的な接触に先立って成立した後、主として19 世紀末以降、植民地時代を通じて拡大してきたものであることが明らかになっている[里見 2010]。

今日のマライタ島北部において、こうした人工島の過去あるいは現在における居住者や、言語や親族関係を通じてそれらの人工島居住者に結び付いた人々は、通常、上記の通り「トロ」に対比される「アシ」という集団カテゴリーによって指示される。この「アシ」カテゴリーは、今日のマライタ島北部において、自称・他称いずれの場合でも「ラウ」より一般的と思われるため、本稿でも「アシ」を採用する[6]。「海」を意味する「アシ」は、もともとこの人々の居住空間・居住形態を指すものだが、*Gemelu Asi...*（私たちアシは……）や *Asi gi*（アシの人たち）といった表現に見られるように、集団カテゴリーとしても用いられる。現地において「アシ」は、「トロ」――それ自体複数の方言を含む――の人々にも理解可能ではあるが発音や一部の語彙において明確に異質な言語を話し、また非キリスト教時代に、「トロ」では行われていなかった *tolo raea* と呼ばれる複葬慣習を行うなどの文化的な特徴をもつとされる。

「アシ」の用法は、メラネシアにおける集団カテゴリーについてしばしば指摘されるようにあくまで可変的・文脈依存的であり[e.g. Wagner 1974]、現在人工島に住んでいるか否か、あるいは過去や現在における人工島居住者の父系的子孫であるか否かといった点は、「アシ」とそれ以外の人々を区別する単独の規準をなすものではない。とはいえ、集団カテゴリーとしての「アシ」が、独自の居住空間としての「海」（アシ）と不可分であることは疑いえないように思われる。より具体的には、「アシ」カテゴリーは根底において、200 年以上と推定される長期に渡り、人々が、現在では 100 個近くを数える人工の島々に居住してきたという集合的事実に基づくものであり、また今日なお、そうした事実に関わってきた人々のまとまりを指示するものと思われるのである[7]。

調査中の 2009 年 7 月、筆者に対しある男性（30 代）は、「アシ」と「トロ」の言語について次のように説明してくれた。すなわち、文献でバエレレア語地域に区分される「トロ」では、15～30 分くらい歩くごとに、バエフア Baefua、バエランガ Baelanga、バエボ Baebo といった異なる言葉――バエレレア語に含まれる諸方言――が話されている村に出くわす。これに対し「アシ」では、海上および海岸部に住む人々の間で、サンゴ礁 *mai*、すなわちいわゆるラウ・ラグーンの南端まで 30 km 以上に渡り、「ずーっと *lee...le*」同じ言葉――「アシの言葉 *baelaa Asi*」、あるいは既存の文献で言われる「ラウ語」――

[6] 指示対象の上では、本稿における「アシ」は既存の文献での「ラウ」と基本的に一致する。
[7] 居住空間としての「海」が集団的アイデンティティとしての「アシ」を規定・構成しているというこうした事情は、同じメラネシア島嶼部のヴァヌアツの事例を念頭にボヌメゾンが提示する、「地理的アイデンティティ geographical identity」[Bonnemaison 1985: 30]――個人や集団が、場所との関係を通じて獲得し維持するアイデンティティ――の概念にも合致するものと思われる。

が話されている、というのである。この語りには、ラウ・ラグーンが、その上に人工島群が広がる海として一続きの居住空間をなしており、かつ、そこに住まい、言語を共有してきた人々が、自他によって「アシ」というひとまとまりの人々とみなされてきたという事実がよく示されているように思われる[8]。そして以下で見るように、アシにおける「トポジェニー」としての移住伝承は、そのように重なり合った居住形態と集団的アイデンティティの形成過程をまさしく物語るものとなっているのである。

２　調査地：T 村と沖合人工島群

本稿で示す移住伝承の事例は、いずれも筆者の直接の調査地であるマライタ島北東部の T 村とその沖合に広がる人工島群（図 1）での聞き取りから得られたものである。T 村は、同島中西岸のマライタ州都アウキから、乗り合いトラックで約 4 時間――走行距離にして約 100 km――走ったところに位置する、本島海岸部の村落である。1935 年にカトリック教会が設置され、現在でも司祭が常駐する T 村は、学校や診療所をも備え、中心部には約 40 世帯 260 人が居住する相対的に大規模な集落となっている。

本稿でいうアシ地域、すなわちいわゆるラウ・ラグーンとその沿岸の北端に近いこの T 村の沖合には、図 1 のように調査時点で 16 個の人工島が点在しており、うち 10 個には現在でも人々が居住し、他方 6 個は放棄され無人となっている。有人の 10 個の島の現住人口は合計約 190 人で、それらのうち大きなものでも居住者は 30～40 人程度と、いずれもアシ地域全体の基準からして中～小規模な部類に属する。これらの島々の居住者は、本島の T 村や耕地との間を、カヌーで日常的に行き来して生活している。

沖合の人工島群との対比において、T 村のある本島海岸部は「陸地 *hara*」と呼ばれる。言語区分上、T 村は「トロ」ではなく「アシ」の集落とみなされており、T 村の人々も多くの場合、沖合人工島群の居住者とともに「アシの人たち」と呼ばれ、また自称する。人々によれば、現在見られるような集住地としての T 村は、1970 年代後半から 80 年代後半にかけ、数度に渡るサイクロンによる被害を受けて、人々が人工島群から本島海岸部に徐々に移住する過程で形成されたものである。それ以前、現在 T 村がある海岸部には、カトリック教会の他は、今日でもこの土地の慣習的所有者とみなされている T 氏族[9]の人々の祖

---

[8] この男性の語りに読み取れる、ラウ・ラグーン全体をひとつの居住空間とみなす意識は、後述するアシの人工島群の形成過程において、既存の人工島からの反復的な分出を通じて島々が相互に結び付けられてきたという事実と不可分と思われる（Ⅳ章の２参照）。なお本稿では、集団的アイデンティティとしての「アシ」を、人工島居住に関するこのような事実認識に基づく、基本的に認知的な性質のものと理解しており（Ⅰ章で示した、本稿における「集団的アイデンティティ」の定義をも参照）、「同じアシ」としての情緒的一体感や共通利害の意識といった価値・規範性をそこに読み込むことは必ずしも妥当でないと見ている。この点については、注 15 での同じマライタ島のクワラアエ Kwara'ae 語地域との対比、およびⅤ章での議論を参照。

[9] 本稿では、先行研究[e.g. Maranda and Köngäs Maranda 1970]にならい、アシの父系出自集団 *'ae bara* を「氏族」と呼ぶこととする。

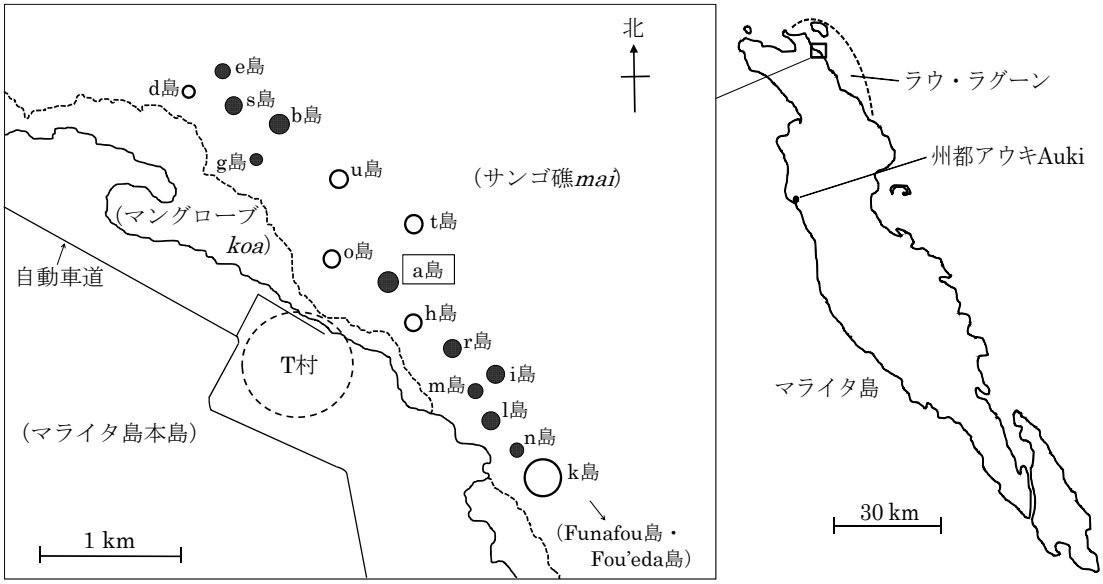

図１：マライタ島、およびＴ村と沖合人工島群（●は現在有人、○は無人の人工島）

父たちがわずかに数世帯を構えていたにすぎず､他方､海上に点在する人工島群こそが人々の主な居住空間をなしていたと考えられる。

３　「アシ」アイデンティティの現状と移住伝承

Ｉ章の末尾でも触れたように、今日のマライタ島では、本稿でも所与の民族誌的対象として前提されているかに見える「アシ」という集団的アイデンティティ、およびそれと不可分な人工島という居住形態に対する人々の意識に、潜在的ながら根本的な変化が生じつつある。そしてその中で、本稿で取り上げる移住伝承も、新たな意味付けを得ようとしているように見えるのである。2009 年 6 月、50 代のもと人工島居住者の男性が、慣習的土地権をめぐる紛争についての会話の中で筆者に語った､「人は空から降ってきたり海から出てきたりはしない。だから、人には必ず帰ることのできる土地というものがあるのだ」という言葉は、こうした状況について示唆的と思われる。

次章の事例１に見るように、今日「アシ」と呼ばれる人々は、自分たちはもともと「トロ」としてマライタ島の内陸山地部の各地に居住していたのだが、それぞれの氏族の父系的祖先が、異なる時期にさまざまな経路で移住を繰り返した後、マライタ島北東部に到達して「海に住む」ようになったという認識を共有している。このことは、現在見られる「アシ」という集団的アイデンティティ自体が、こうした移住の過程で形成・獲得されたものであることを含意しているが、このような認識は、近隣の「トロ」の人々によってと同様、研究者たちにも基本的に共有されてきた[e.g. Maranda and Köngäs Maranda 1970: 832; Keesing 1982b: 8, 11] [10]。そして、人々におけるこうした認識の根拠になっているのが、次

[10] このような集団的アイデンティティの形成・獲得を、本稿では分析上、「祖先がアシになる」過程と表現している。ただし、現地語では *hau 'ana*（～になる）という動詞表現自体があまり

章以降で見るような一連の移住伝承に他ならない。

他方、今日のマライタ島では、人口増による土地不足への不安や、2000 年前後のソロモン諸島におけるいわゆる「民族紛争 ethnic tension」を背景に、人々は、人工島をも含め現在の居住地を離れ、通常は「トロ」、すなわちマライタ島内陸部にあるとされる、自らの氏族の *'ae fera*（もともとの居住地、故地）へと「帰る」べきだ、あるいは近い将来にそうすることを余儀なくされる、という意識が広く共有されている。こうした意識はとくに、以下で見るように、伝承において他地域からの移住者として語られるアシの人々が、多くの場合、現住地に近接するマライタ島本島海岸部に土地を保有していないという事情と関わっている[11]。事実、「人工島には畑を作ることもできない。だからわれわれはさと *fera*〔*'ae fera* を指す〕に戻ろうと思う」といった語りを今日アシの人々から聞くことは珍しくない。

現時点で、氏族の「故地」へのそうした移住は集団的な規模では生じていないが、アシの人々はこのように、伝承に語られる祖先の移住経路を逆向きにたどる「トロ」への移住を、未来においてありうるものとしてたしかに意識している。こうした意識において人々はまた、祖先が人工島居住を通じて獲得したという「アシ」アイデンティティを、再び脱ぎ捨てようとしているかにも見える。集団的アイデンティティとしての「アシ」は現在、これまで自他によって「アシ」とみなされてきた当の人々において、このようにあくまで不安定なものとして経験されており、以下で見るような移住伝承も、人々が「帰ることのできる土地」を指し示す語りとして、新たに受け取り直されつつあるのである[12]。

なお、本稿が検討の対象とする移住伝承は、アシにおいて *'ai ni mae* と総称される祖先

用いられないため、「アシになる」という言い方は必ずしも一般的に聞かれるものではない。なお、「人は空から降ってきたり海から出てきたりはしない」という上の言葉には、アシにおいて「超自然的」というべき起源神話が語られず[Maranda 2001: 98]、集団の形成史が、次章以降で見るように、マライタ島内におけるあくまで具体的な移住過程として語られる――まさしくフォックスの言う「トポジェニー」（Ⅰ章参照）のかたちで――という事情が示唆されている。

[11] 前項で述べた T 村の場合も、同村現住のもと人工島居住者たちを成員とする諸氏族（後掲の事例 1 の G 氏族、S 氏族など）のほとんどは、T 村のある本島海岸部の土地を慣習的に保有していない。同様に、これらもと人工島居住者にとって T 村は自身の *'ae fera* ではなく、前項で述べた、70～80 年代における本島海岸部への移住は、ここで言う「*'ae fera* に帰る」という動きとは別のものである。

[12] 宮内[2003]は、同じマライタ島北部のファタレカ語地域から、同様な内陸部への移住の動きを報告し、これを、彼の言う「二重戦略」、すなわち自給経済と貨幣経済の双方へのアクセスを維持しようとする人々の志向や、天然資源開発や「民族紛争」の影響下での土地の所有・利用をめぐる意識の変化など、いくつかの要因の産物として考察している。これらの要因はアシの現状にもおそらく部分的に指摘しうるが、他方、アシにおける「故地」への移住の動きは、それが集団的アイデンティティとしての「アシ」それ自体を疑問に付すものである――同じことは、ファタレカなど「トロ」地域にはおそらく指摘できない――という点で独特と思われる。なお、アシにおける移住の動き自体については、「トポジェニー」の報告・考察という本稿の主題を超えるものであり、機会を改めて論じることとしたい。

伝承の主要な一部をなすものである[13]。キリスト教がほぼ全面的に浸透した今日のマライタ島北部において、*'ai ni mae* は、*talisi baraa* と呼ばれる氏族の父系的系譜などとともに、「カストム *kastom*」、すなわち非キリスト教的な過去に関わる伝統的知識に属するものと理解されている。そうした伝承を調査・考察する上では、キリスト教化や、太平洋戦争直後のマライタ島における反植民地運動であるマーシナ・ルール Maasina Rule 運動――その過程で、いわゆる「カストムの客体化」の動きが生じたとされる[Keesing 1982a]――を経た現在、さまざまな問題が考えられる[14]。これに対し本稿では、調査データ相互の照合に加え、非キリスト教的状況におけるアシに関するマランダとケンゲス＝マランダの一連の研究[e.g. Maranda and Köngäs Maranda 1970]や、マーシナ・ルール以前の報告であるアイヴェンズの著作[Ivens 1978(1930)]との照合に基づき、以下で挙げる移住伝承を、今日のアシ地域で見られる類型をおおよそ代表しており（個別の伝承からの再構成である次章の事例 1 についても同様である）、また、キリスト教受容以前の移住に関するものは、同地域の非キリスト教時代の文化的諸条件に基本的に矛盾していないものとみなすこととする。

Ⅲ　移住と居住集団の構成：a 島の事例

上でも述べたように、アシの移住伝承は総体として、言うなれば自分たち（の祖先）がいかにして「アシ」になったかという、現在に至る集団的アイデンティティの形成についての語りをなしている。以下の諸事例が示すように、これらの伝承は総体として、＜マライタ島（主に北部～中部）内陸山地部→海岸部→人工島→人工島間での移住、新たな人工島の創設＞という明確なパターンを形作っている。前章で述べた通り、こうした伝承は、もともと「トロ」としてマライタ島のさまざまな地域に居住していた祖先たちが、移住を通じて「海に住む」に至ったという人々の認識の根拠をなすものである。「アシ」の人々がそのように多様な地理的および出自上の「起源」をもつことからして必然的であるように、「全体としての」アシについての移住伝承に当たるものや、もともと「ひとつ」であったマライタ島北部の人々が、移住や交易の過程で「トロ」と「アシ」へと分化していったという形式――いずれも他地域の「トポジェニー」にしばしば見られる――は見出されない。アシの「トポジェニー」はむしろ、それぞれの氏族の父系的祖先における反復的な移住についての、あくまで個別的な伝承の集合としてあるのである[15]。

---

[13] *'ai ni mae* を含むアシの口頭伝承全般については、ケンゲス＝マランダの報告[Köngäs Maranda 1975]を参照。

[14] 具体的には、ごく少数のインフォーマントから、他の人々にとっての妥当性が定かでない伝承を収集してしまう危険性、あるいは、系譜がそれ以前に知られていたよりも長大なものにされるなど、伝統的知識の内容が著しく変化している可能性などがある。

[15] このことは、バートが報告する、同じマライタ島のクワラアエ語地域の事例[Burt 1982]と

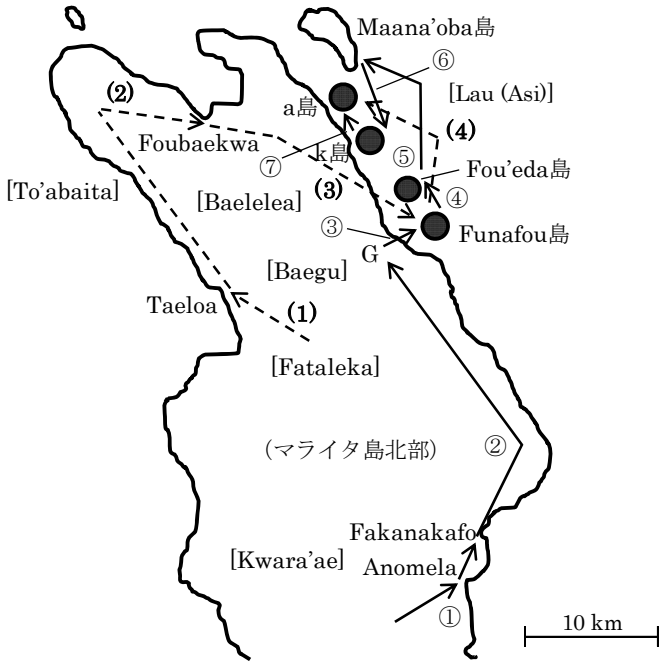

図 2 : 伝承に語られる G 氏族、S 氏族父系的祖先の移住経路（[ ]内は現在の言語区分）

アシの伝承の多くは、移住の繰り返しの中で個別の人工島の居住集団が構成され、また分割・再編される過程――今日見られる人工島群はその産物に他ならない――を語るものとなっている。ここではそうしたパターンを、T 村沖の a 島（図 1 参照）の主な居住集団をかつて構成していた G 氏族と S 氏族という 2 つの親族集団の事例に見ることとしたい。

［事例 1］ a 島の主な居住集団の移住過程（図 2。図中の数字は本文中のそれに対応）

a 島の創設は 1890 年代頃と推定され、現在の主な居住者（30～50 代）は、以下で述べる同島の創設者(G 氏族の男性 M)を第一世代とすれば第四世代に当たる(図 3 参照)。1950～60 年代の最盛期には、10 世帯 60～70 人あるいはそれ以上が同島に居住していたと推定されるが、現住者は 6 世帯 30 人程度にとどまり、かつての居住者やその子の多くは現在 T 村に居住している。同島には過去、主に G 氏族と S 氏族に属する男性の諸世帯が居住していたが、70 年代半ばに S 氏族の最後の 1 世帯が T 村に転出し、現在の同島は G 氏族の成員男性を中心とする諸世帯のみになっている[16]。

顕著な対照をなすものと思われる。すなわちバートによれば、同地域では、マーシナ・ルール運動の後、この地域全体を再び政治的に統合・組織化しようとする 1960 年代以降の動きの中で、すべてのクワラアエの人々を単一の始祖の子孫であるとする物語が広く共有されるようになったという[Burt 1982: 391-398]。集団を統合された単一の全体として語り、またそうした一体性それ自体を政治運動上の価値・規範とするこのような物語とアシの伝承の性格上の対比については、V 章の 2 をも参照されたい。

[16] 以下で示す G 氏族の移住経路は、30～60 代の同氏族成員の男性 3 人と 50 代の S 氏族成員の男性 1 人からの、S 氏族のそれは 40～50 代の同氏族成員の男性 3 人からの聞き取りに主に依拠して再構成したものである。インフォーマント間には部分的な不一致が見出され、また聞

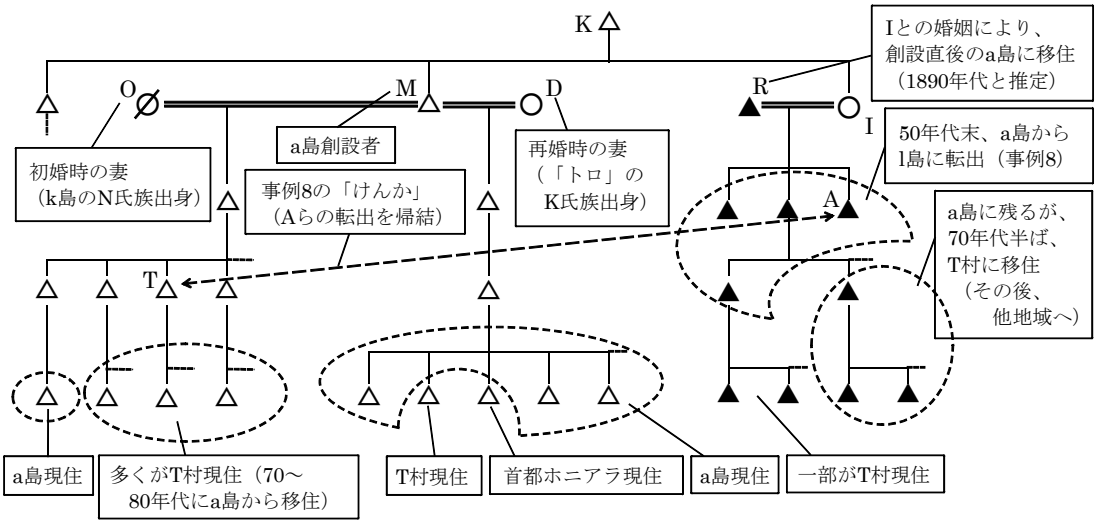

図 3：a 島居住者の親族関係（部分。△は G 氏族、▲は S 氏族の成員男性を表す）

［G 氏族の移住過程］

①マライタ島中部、現在のクワラアエ語地域に居住していた父系的祖先が、あるとき、同島東岸の Anomela、次いで Fakanakafo――いずれも現在の T 村の約 40 km 南方――に移住（なお Fakanakafo は、現在 G 氏族の「故地 *'ae fera*」とされる）[17]。

②その後、集団の一部が北上し、現在のアシ地域に接する海岸部の土地 G に移住。

③その後さらに、他の集団の人々によってすでに建設されていた Funafou 島に一部が移住（事例 2 として後述）[18]。

④その後まもなく、Fou'eda 島を自ら新たに建設して Funafou 島から転出（事例 5 参照）。

⑤その後、*ramo*――いわゆる「戦士長 warrior-leader」[Keesing 1985]――であったとされる G 氏族の男性 K が単身で Fou'eda 島から転出し、マライタ島北東沖の天然島 Maana'oba 島の近くの小島に移住し、その後この地で婚姻、男子 2 人と女子 1 人をもうける（図 3 参照）。

⑥この男子のひとり M は、成人して後、T 村沖で最初に成立した k 島の創始・居住集団で

き取りで得られた伝承にはおそらく欠落が含まれるが、全体としての移住経路については、インフォーマントやその他の人々の間におおよその合意が認められる。

[17] 主なインフォーマント（G 氏族の男性の一人）が系譜的知識を明らかにしなかったため世代深度は不明であり、また移住の人的規模も明らかでない。筆者の収集した事例の多くは、このような最初期の「トロ」からの移住について詳細を語っていないが、そうした移住は、伝統的状況におけるマライタ島について指摘されてきた、土地への人口圧などを動因とする散発的な移住・拡散という一般的なパターン[Ross 1973: ch.12; Keesing 1992: 20-21]に合致するものと考えられる。

[18] これに続く世代深度から、ごく大雑把には 18 世紀中頃と推定される。なお、マライタ島北部で最古の人工島に属する Funafou、Fou'eda の両島は、既存の文献で繰り返し言及されていることから、本稿でも実名で記すこととする。

ある N 氏族に属する女性 O と婚姻し、妻方の k 島に住むが、この妻は男子 1 人を産んだのみでまもなく没する。

⑦男性 M は新たに a 島を建設し、前妻との間の男子とともに妻方の k 島から転出。これと前後して、現在の T 村北方に居住していた「トロ」の K 氏族出身の妻 D と再婚する[19]。

［S 氏族の移住過程］

(1)G 氏族の祖先と同様、内陸山地部に居住していたとされる父系祖先が、あるときマライタ島北西海岸部、現在のファタレカ語地域西部の Taeloa――現在、S 氏族の「故地 *'ae fera*」とされる――に移住・定着する。

(2)その後、現在の S 氏族の中心世代より 13 世代前の[20]、戦士長 *ramo* であったとされる男性祖先 B が、集団間戦闘 *omea* への参加を契機として Taeloa から転出し、マライタ島北端の湾 Suu に面した土地 Foubaekwa に単身で移住し、その地で婚姻する（事例 4 として後述）。

(3)その 6 世代後、Foubaekwa に住んでいた男性成員のひとり L が、漁撈用の網の製作者として招聘され単身で Funafou 島に移住し、そこで婚姻し定着（事例 3 参照）。S 氏族の男性成員としてはじめて「海に住む」ことになる[21]。

(4)その 4 世代後、S 氏族の男性 R が、T 村沖に a 島を創始した上記の G 氏族の男性 M の妹 I と婚姻（図 3 参照）、建設され始めたばかりであった a 島に、自ら一区画を建設して居住し始める（1890 年代と推定）。

伝承によれば、a 島の上ではこのように、まったく異なる「起源」と移住史をもつ 2 つの氏族の人々が、19 世紀末から 1970 年代半ばまで共住していた。こうした共住の事例は決して例外的なものではなく、アシの移住伝承は多くの場合、個別の人工島の居住集団を、このように多様な移住過程の交叉の産物として語るものになっている。前章で述べたように、「アシ」が人工島居住を共通に営む人々に対する集団カテゴリーとして形成されてきたならば、伝承に語られるこうした個別の人工島の居住集団の構成、さらにはその反復的な分割と再構成は、「アシ」というアイデンティティそれ自体の形成過程の諸部分をなすものといえる。次章では、上の事例 1 に見たような移住過程の個別の段階を物語る伝承を例示することで、「アシ」アイデンティティの形成に関わる「トポジェニー」としてのこれらの

---

[19] 以上に基づき大雑把な推定を試みると、Funafou 島に住み始めた父系祖先（③）を第一世代とすれば、a 島創始者 M（⑥、⑦）はおおよそ第六世代に当たる。現在の主な a 島居住者（30～50 代）はこの男性 M の曾孫であり、G 氏族の人々は今日までにおおよそ 9 世代の「海に住む」系譜をもつことになる。こうした世代深度は、アイヴェンズの著作に示された Funafou 島その他の居住集団の系譜[Ivens 1978(1930): 63, 66-68]と比較しても不自然でない。

[20] インフォーマントの一人によるが、他集団の系譜と比較してこの世代深度は過大と思われる。

[21] 以上の系譜・伝承は、S 氏族の人々が「海に住む」ようになってから現在まで約 7 世代という事実を含意する。この世代深度は、上で見た G 氏族の事例などと比較しても不自然でない。

移住伝承の特質を、より具体的に検討する[22]。

Ⅳ　移住伝承の諸事例

１　本島から人工島への移住

前章で指摘した、「トロ」からの移住という一般的パターンからして必然的であるように、今日「アシ」とみなされる諸氏族の多くは、自らの父系的祖先がはじめて「海に住む」に至った経緯を物語る伝承をもっている。「トロ」から「アシ」へという居住空間とアイデンティティの変容に関わるこうした伝承について、ここでは 2 つの事例を見る。

［事例 2］ G 氏族の父系祖先の、本島から Funafou 島への移住（事例 1 の③）

G 氏族の人々はこの頃、〔マライタ島北東岸の〕G という土地に住んでいた。ある時、川に沿って歩いていたこの集団の祭司 *aarai ni foa* が、川岸に人の胞衣 *buri ngwela*〔字義通りには「子どもの後」〕が捨てられているのを見つけ、これを豚の内臓と勘違いして持ち帰り、石蒸し焼き *bii* にして食べてしまった。G 氏族の他の人々はまもなくこれに気付き、祭司が胞衣を食べたために自分たちの男性小屋 *beu* が *sua* になって〔けがれて〕しまったと考えた。G 氏族の別の祭司はこれを受け、*beu* から、氏族に伝わる武器などの重要な器物を持ち出し、カヌーに載せて、自身の妻の出身地である Funafou 島に逃げ、そこに住まうことになった[23]。

この事例では、儀礼的・象徴的禁忌への違反、具体的には、祭司による祖先崇拝 *foa* と女性の月経・出産の空間的分離への違反が、移住・転出の契機として語られている[24]。禁忌への違反を契機としたこうした転出は、アシあるいはマライタ島北部における移住伝承の定型的パターンのひとつといえる。また上のように、通婚を通じた女性の移住――この場合、Funafou 島から G 氏族が住む本島海岸部への――が、それ自体としては伝承の主題とされないままに前提されている点も、他の伝承にしばしば見られる特徴である。

上の事例が、G 氏族の男性が妻方の Funafou 島に「避難」する経緯を語っているように、多くの伝承は、アシの人々の父系的祖先を、新たな居住地における移住者・外来者――アシの言語では「（よそから）やって来て住み着いた人 *ngwane dao ka too*」――として描き

---

22 ただし、次章で示すのは、アシの伝承の内容レベルでの要約にとどまる。より具体的・個別的な語り口や語り・受容の状況についての分析は、機会を改めて試みることとしたい。

23 〔〕内は筆者による補足（以下の事例でも同様）。なお、他の親族もこれとともに Funafou 島へ移住したか否かは、筆者の聞き取りでは不明であった。この伝承はまた、すぐ後で、移住した男性が新たに Fou'eda 島を創設するエピソードを語っている（後掲の事例 5 参照）。

24 キリスト教化以前のアシにおける空間区分とそれに関連した禁忌については、マランダとケンゲス＝マランダの研究[Maranda and Köngäs Maranda 1970]を参照。

出すものである（以下の事例 3、4 も同様）。さらに、上の事例で、女性を通じた姻族関係をたどるかたちで、それまで人工島に住んでいなかった男性（たち）が「海に住み」始めているように、伝承に語られる人工島居住の拡大は、しばしば父系出自以外の関係に沿って生じたものとされる（次の事例 3 も同様）。この点は、メラネシアの他地域についてしばしば指摘されてきた、居住集団の非単系的な構成という傾向と一面で合致するとともに、海上居住形態を共有する人々としての「アシ」という集団的アイデンティティが、氏族を構成する出自原理とは大部分独立に形成されてきたことを示唆するものとして注目に値する。

次の事例は、上とは異なり、通婚関係がもともと存在しなかった場所への移住を語るものである。

［事例 3］ S 氏族の父系祖先 L の、本島から Funafou 島への移住（事例 1 の(3)）

S 氏族の男性 L は、マライタ島北端の湾に面した土地 Foubaekwa に住んでいた。あるとき、Foubaekwa の近くの Kwai 川の傍の Maatakwalaa という土地で開かれる市場 *uusia* に出かけると、Funafou 島から来た男性 U が市場で、森で採れる植物の繊維を用いて小型の漁撈用の網 *fuurai rasi* を作ることができる人物を探し求めていた。男性 L は、川での漁撈のためにこうした種類の網を作ることに習熟していたので、この要請に応え、男性 U とともに Funafou 島に赴き、そこに住んで同島の人々のために網を作ることになった。ある時、男性 L は病気になり寝込んでしまったが、彼を Funafou 島に受け入れた男性 U は、自身の妹の A に彼の世話・看病を申しつけた。これがきっかけで男性 L はこの女性 A と婚姻し、Funafou 島に定着することになった。

この事例には、オセアニア／メラネシアの他地域でも広く指摘される、独身男性が移住先の女性と婚姻し定着するという形式が見られる（次の事例 4 も同様）。また、マライタ島北部に特徴的な、トロとアシの人々が交易を行う市場[Ross 1978]は、このように伝承においてしばしば重要な舞台として――たとえばトロ／アシの氏族間の衝突の端緒となった場所として――言及される。上の事例は、市場での偶然と言うべき出会いを、それまで「トロ」に住んでいた男性の人工島への移住、そしてその子孫たちにおける「アシ」という新たなアイデンティティの獲得を帰結した契機として語るものになっている。

ここで比較のために、上の 2 事例とは異なり、人工島居住とは直接には無関係な、本島の 2 つの場所の間での移住を語る伝承を見ることとしたい。次の事例は、S 氏族において、すぐ上の男性 L の「6 世代前」――インフォーマントの一人によれば――の父系祖先とされる男性の移住（事例 1 の(2)）、言うなれば S 氏族の人々が「アシ」になる以前のそれを語るものである。

［事例 4］ S 氏族の父系祖先 B の、集団間戦闘 *omea* への参加を契機とした移住

現在のファタレカ語地域西部、Taeloa に住んでいた S 氏族の戦士長 *ramo* であった男性 B は、Foubaekwa の人々〔先住集団〕が、*omea* に際し対立集団の成員を報復的に殺害することへの懸賞 *finisi* を掲げていることを聞き、この *omea* に参加したいと考えた。Taeloa には川が流れており、そこに住んでいる鷲 *noo aabu* に襲われることなくこの川を泳ぎ渡ることができたならば *omea* に勝つことができるとされていたが、男性 B はこの占い *ilitooa* を試み、うまく川を渡って *omea* に参加することを決めた。Foubaekwa の人々は、この男性 B らの助力を得て *ome*a に勝ち〔それ以前の戦闘・殺害の報復を果たし〕、貝貨、豚などの *finisi* を分配することにしたが、このとき男性 B は、自身の *subi*〔マライタ島の伝統的な武器である、先端が菱形の短い棍棒〕で地面を何度か叩く動作をした。これは殺害への報酬 *duumae* として土地 *gano* が欲しいという意思を表すものであり、男性 B はこうして Foubaekwa の人々から土地の一部を得て同地に定着することになった。男性 B はその後この土地で婚姻した。

この事例では、移住、さらには親族関係の（再）構成の動因として、植民地政府による「平定 pacification」以前のマライタ島で行われていた *omea* と呼ばれる集団間戦闘が語られている。こうした戦闘は、先に見た禁忌への違反などとともに、アシあるいは同島一般の移住伝承において定型的な契機をなすものである。戦闘に関わるこのような伝承には、本島から人工島への移住に関わる先の事例 2、3 と同様、居住集団や親族関係が、氏族を構成する父系出自から独立した、しばしば高度に偶有的な契機によって形成あるいは変更されうるという含意を読み取ることができる[25]。

さて、以上の諸事例は、集団的アイデンティティとしての「アシ」に関して、いくつかの重要な特質を示唆するものと思われる。まず、本稿が先の事例 1 において、a 島の居住集団の構成を、形式上「G 氏族と S 氏族の移住伝承／移住過程」として記述していたのに対し、以上の事例 2～4 は、アシの伝承とそこに語られる移住過程を、特定の親族集団の――語り手においては「われわれの *gemelu*」――ものとみなすことができるのが、あくまで事後的な意味においてに過ぎないことを示唆している。というのも、一連の事例が示すように、アシの伝承において明確に「集団的」といえる規模の移住が語られることはむしろ例外的であり、そこではむしろ、男性ひとり、あるいは男性 2～3 人とその家族といった小規模な移住についての語りが支配的である（事例 1 に含まれるいくつかの段階も同様である）。そしてそうした小規模な移住の連鎖が、事後的に「自分たちの」父系祖先の移住過程として了解されているのである。

同じことは、本稿の記述が前提しているかに見える「アシ」という集団的アイデンティ

[25] 他方、V 章で後述するテリトリー性の問題に関する事例 2、3 と事例 4 の相違については、注 33 を参照。

ティに関しても指摘できる。上の事例 2、3 は、それまでマライタ島本島の「トロ」に居住していた人々が、氏族の祭司による儀礼的禁忌への違反、あるいは市場での出会いといった偶然とも言うべき契機によって、既存の人工島へと移住する過程を語っている。独自の居住形態の共有に基づく「アシ」というアイデンティティは、伝承に語られる人々の子孫において、このような移住過程の結果として形成され獲得されるものに他ならず、これらの移住伝承を総体として「アシの」それとみなすことができるのも、あくまでそうした事後的な視点によってのみである。上で例示したような一群の伝承はこのように、あらかじめ存在する「アシ」という集団の移住をではなく、むしろ、繰り返される多様な移住を通じて「アシ」という集団的アイデンティティそれ自体が生成される過程を語るものとなっているのである。

加えて注目すべきは、上で見たような伝承において、人工島という居住形態、さらにはその産物としての「アシ」アイデンティティが、出自上の同一性に基づく氏族の間の境界や、ある時点における居住集団あるいは「アシ／トロ」の区別を、不断に、繰り返し横断するものとして語られている点である。それぞれの氏族の父系的祖先がいかにして「海に住み」始めるに至ったかを語る上の事例 2、3 は、海上居住が、すでに人工島に居住していた人々から、それらの人々と姻族関係その他の媒介によって結び付いた、いまだ「海に住んで」いない――今日では「トロ」とみなされる――人々へと広がっていく過程を物語っている。こうした伝承において、人工島という居住形態は、すでに形成された特定の集団に限定されることなく、それどころかまったく逆に、雑多でしばしば偶然的と見える媒介によって、次々と拡大していくものとして現れている。それはあたかも、この居住形態が、それをすでに行っている人々からそうでない人々へと、隣接・接触を通じて「伝染」していくかのようである。以上でその例を見たアシの移住伝承は、総体として、海上居住がそうした「伝染」によって既存の集団的境界をたえず横断し、それによって「アシ」アイデンティティが形成・拡大されていく過程を語るものとなっているといえるだろう。

２　人工島の創設、および人工島間での移住

アシにおける「トポジェニー」としての移住伝承の特質を以上のように指摘した上で、次に、比較的最近の出来事を語るものも含め、アシ地域できわめて豊富に見出される、人工島から別の人工島への移住・転出を語る伝承を見ることとしたい。それらの一部は移住先の人工島が既存のものである場合――以下の事例 6 や 8、ただし前者での直接の移住先は天然の島である――を、また別の一部は移住先の島が新たに創始・建設される場合――事例 5 や 7――を語るものである。

ここで注目すべきは、次の事例 5 に典型的に見られるように、アシ地域の人工島の大半が、それまで他の人工島に住んでいた男性が、その島から転出して自ら新たに島を創設するというかたちで、すなわち、言うなれば「親」に当たる人工島から「子」に当たる島が

分出する――そして、こうした分出が次の「世代」へと繰り返される――というかたちで成立したものとして語られている点である。このような一群の伝承において、今日のアシ地域に見られる多数の人工島は、相互に独立に建設されたものとしてではなく、反復的な分出を通じてゆるやかに結び合わされたものとして語られている[26]。人工島群の形成過程についてのこうした認識は、集団カテゴリーとしての「アシ」との関連においてⅡ章の１で触れたように、今日いわゆるラウ・ラグーンの全体をひとつの居住空間として――さらには、そこに住まう人々を「アシ」というひとまとまりの人々として――見ることを可能にしている主要な契機であると考えられる。以下で見るのは、このようにアシの「トポジェニー」の重要な一部をなす、反復的な分出を通じた人工島群の拡大に関する伝承の諸事例である。

［事例 5］ G 氏族の男性による Fou'eda 島の創始（事例 2 の続き。事例 1 の④）

妻とともに本島の G から Funafou 島に移住した G 氏族の男性は、移住のしばらく後、Funafou 島の北方〔数百メートル離れた海上〕でサンゴの岩が海上に隆起している部分に目を付け、それを島として拡張し住めるようにすることを考えた。この男性は岩の周りに石を積み上げ、島を造って自身の住居 *luma* や男性小屋 *beu* を設け Funafou 島から移り住んだ。これが現在の Fou'eda 島の始まりである。

同種の伝承との類比から、この事例では、Funafou 島からの転出の動機として、一時避難先であった同島が、G 氏族の男性にとっては妻方の島に過ぎず、自身の息子たち――移住時点ですでに生まれていたのか否かは明示されていないが――が将来長期に渡って居住するには適さないという判断が含意されているものと考えられる。妻方の人工島に移住した男性が、子の出生などにともない転出して自ら新たな島を創始・建設するという同様な経緯は、新たな人工島の創設動機としてしばしば聞かれるものである。

同様に一般的なのは、*firulaa*（けんか、衝突）――動詞的には *firu*――と表現される、メラネシアの他地域とも共通する親族間の対立・不和という契機である。

［事例 6］ G 氏族の一部の人々の、自ら創始したという Fou'eda 島からの転出[27]

G 氏族の人々は、Fou'eda 島居住時、祖先崇拝と結び付いて儀礼的に規制されたウミガメ *fonu* 漁を行っていたが、あるとき、同島に住んでいた〔別の氏族に属する〕意地の悪い *lio ta'aa* 男性が、G 氏族の人々が捕ったウミガメの甲羅を、同島の女性の隔離区

[26] アシの人工島居住の「起源」についての既存の説明（注 5 参照）は、このような、反復的な分出を通じた島々相互の結び付きという契機を考慮していない点で、一面的と思われる。
[27] 後に e 島や b 島を創設するこの人々は、G 氏族の中でも、後に a 島を創設したのとは異なる下位集団に属する。この下位集団については図 2、3 に示していない。

画 *maana bisi* に投げ込んだ。これによって G 氏族の人々は他の Fou'eda 島居住者たちとけんかをし *firu*、同島を出て Maana'oba 島の Haleta に移住することになった。

この事例では、G 氏族の祭司が誤って胞衣を口にしてしまったという先の事例 2 と同様な空間的禁忌への違反が、それまで人工島の居住集団を構成していた親族間の対立、さらには一部の人々の転出を帰結したものとして語られている。なお、アシの人々において、親族間のこうした不和・衝突とそれによる転出は通常、関係の完全な断絶を意味するものとしては語られず、多くの場合、転出・移住の後、親族間の関係は回復されたものとされる[28]。転出の後でも維持されるそうした関係は、事後的に見て、次々と新設される島々とそこに居住する人々を、相互にゆるやかに結び合わせてきた契機のひとつと考えられる。

最後に、より新しい時期、具体的には 20 世紀に入ってからの、同様に親族間の対立を契機とした人工島間の移住についての 2 つの語りを見ることとしたい。

［事例 7］ k 島から転出した 2 人の兄弟による l 島の創設（1930 年代と推定）

l 島は、2 人の〔実の〕兄弟によって建設された島である。両者は、〔G 氏族の人々が転出して後の〕Fou'eda 島の主な居住集団である R 氏族の成員であったが、N 氏族の人々が建設し主に居住する k 島に〔N 氏族の非父系的な親族として〕住んでいた。ある時、k 島で人々がクリケットをして遊んでいた時[29]、この兄弟にとってはオジ *ko'o* に当たる N 氏族の男性が打った球がこの兄の顔に当たった。これがきっかけでこの兄は k 島の他の人々とけんかをし、不仲になったが、〔この兄は同島のもともとの居住集団に属さないので〕やむなく新たに島を造って移り住むことにした。そうしてこの兄は弟と 2 人で、海上に岩が隆起していた k 島の北方〔数百メートル離れたところ〕に l 島を建設し住まうことになった。

［事例 8］ S 氏族の一部の人々の、a 島から l 島への転出（1950 年代末と推定。図 3 参照）

S 氏族の男性成員としてはじめて a 島に住んだ男性 R には 3 人の男子がいたが、〔男性 R はすでに没した〕この時期、3 人はすでに高齢に近付いており、とくに妻をすでに亡くした三男 A は、高齢のために頭がよくなくなって〔ぼけかかって〕いた。ある時 A は、同じ a 島に住んでいた G 氏族の男性 T〔a 島創設者 M の初婚時の男子の三男で、男性 A の「オイ *ko'o*」に当たる〕と口論になり、後者を殴った *kwaea*。T は腹を立て *rakena*

[28] そうした関係は、具体的には婚姻――とくに婚資 *foelaa* の支払い――などに際しての互助的関係や、もとの人工島に戻っての祖先崇拝儀礼 *foa* への参加というかたちをとるとされる。

[29] ここで登場するクリケットは、マライタ島北部には、19 世紀末から 20 世紀初頭、いわゆる労働交易 Labour Trade からの帰還者によってもたらされたものと推定される。個別の人工島に関する、一見「伝統的」な語りの中に、植民地主義をめぐる歴史的体験を間接的なかたちで記録しているこの事例 7 には、VI章でも再び触れる。

ka hasu、A を海に突き落とした。A は海からはい上がり、a 島の隅の石の上にしゃがんでベソをかいていた。その時、T 村北方の海で漁をして戻ってきた l 島の男性たち〔事例 7 の兄弟の近親者たち〕が a 島のそばを通りかかり、ひとりでベソをかいている A に事態について訊ねた。T とのけんかについて聞いた l 島の人々は、A をカヌーに乗せて l 島まで連れて行った。その後、本島の畑から a 島に戻ってきた A のオイ〔A の次兄の長男〕らが事件について知り、A の兄ら〔長兄と次兄〕とともに A を追って l 島に移り住んだ。a 島からのこの移住者たちは、やがて l 島の一部を拡張し自分たちの住居を建てたが、他方、A のオイの一人〔A の次兄の次男〕など、S 氏族の一部の世帯はこれ以後も a 島に残った。

現在より 1～2 世代前の親族に関わるこうした語りは、通常は祖先伝承 *'ai ni mae* とは呼ばれない。その反面で多くの事例は、上の 2 つのように、親族間の対立による転出といった移住伝承における定型性を反復することにより、より古い時代に関する伝承との一定の連続性を示している。そうした連続性は、「海に住む」ことを通じて「アシ」になるという、上で一群の移住伝承に読み取ったような集団的アイデンティティの変化・生成が、19 世紀末以降の植民地時代に至っても持続していたことを示唆しているように思われる。

T 村沖では、上の事例 7、8 の他にも、たとえば l 島とほぼ同じ 1930 年代と推定される時期、それまで人工島に住んだことがなかった、言い換えれば「トロ」であったとされる T 氏族の人々――先述のように、今日まで T 村の土地の慣習的所有者とみなされている――が、u 島と o 島という 2 つの人工島を新たに創始し居住し始めたことが知られている。これら 2 つの島の建設作業は主に、この T 氏族の人々にとって姻族であった、人工島の建設・居住経験の豊富な G 氏族の人々によって行われたとされる。この事例は、先に事例 2、3 に見たのと同様な、「海に住み」始めることによって「アシ」アイデンティティを獲得するという変化・運動が、比較的最近まで継続されていたことをよく示しているように思われる[30]。

Ⅴ　考察

1　移住伝承における（非）テリトリー性

以上では、T 村沖合人工島群の形成に関わる一群の移住伝承を、人工島という居住形態の拡大、および集団的アイデンティティとしての「アシ」の形成に関わる「トポジェニー」として考察した。そこには、多様な「起源」・出自をもつ人々が、反復的な移住の過程で海上居住を開始し、またそうした居住形態が、既存の集団的境界を越えて拡大を繰り返すこ

[30] ただし、u 島と o 島はいずれも現在までに無人化しており、T 氏族の人々の「アシ」としてのアイデンティティは確立されないままに終わっているといえる。

とで、今日のマライタ島北部に見られる「アシ」というアイデンティティが形成されてきた過程を見て取ることができた。本章では、冒頭で述べた「トポジェニー」をめぐる近年の比較民族誌的関心を踏まえ、メラネシアの他地域との比較に基づき、アシにおける移住と集団的アイデンティティの特質についていくつかの考察を付け加えたい。

第一に指摘したいのは、アシにおける移住と集団的アイデンティティの、非テリトリー性とでも呼ぶべき独自の性格である。フォックスが「トポジェニー」と呼ぶところの、移住に関する語りを通じて集団的アイデンティティや集団間関係の形成を物語る神話・伝承は、先述の通りメラネシアの多くの地域で知られているが、これらの神話・伝承にはしばしば、「神話的祖先の移住を通じて、原初的な無秩序が、社会的・文化的秩序、具体的には異なる社会集団とその土地区画（テリトリー）からなる秩序へと移行を遂げる」というパターンが見出される。ボヌメゾンが報告する、原初状態においていくつもの岩が島内を移動することで島の諸部分を分節化し、その後に諸集団がそれらを自らの領域とするに至ったというヴァヌアツのタンナ島 Tanna Is.の神話はそうした例である［Bonnemaison 1985][31]。このような神話・伝承において移住は、テリトリー的な集団、すなわち一定の空間、通常は土地を「自らのもの」として排他的に所有し、かつそうした空間領域との重なりにおいて自他を社会的に境界付けるような集団を成立させる契機として語られているといえる[32]。

上で見たようなアシの移住伝承は、個別の人工島の居住集団に関しても「アシ」というまとまりに関しても、他地域のこうした伝承――それは本稿冒頭で述べたような政治的・イデオロギー論的な分析を誘うものでもある――に見られるのとはあくまで異質な集団のあり方を示しているように思われる。まず、すでに指摘したように、アシの伝承の多くは、自ら（の父系的祖先）を現住地における移住者・外来者として規定するものとなっており、これは通常、マライタ島本島の土地の先住者・占有者としての自身の立場を実質的に否定するものである。この点で、「アシ」というアイデンティティそれ自体が、土地との関係において非テリトリー的（あるいは脱テリトリー的）な性格をもっているといえる[33]。また、

---

[31] 同様に、ヴァスマンとシルバーマンはそれぞれ、ニューギニア、セピック地域のイアトムル Iatmul における、しばしばワニとして表象される神話的祖先の移動についての伝承に、場所論的かつ社会的・集団間的な分節の過程を見出している[Wassmann 2001; Silverman 2001]。またイーヴズは、ニューアイルランド島 New Ireland Is.のレレット Lelet の人々に関して、霊的存在の移動を通じた氏族集団の土地の区画・獲得という類似の観念を報告している[Eves 1997]。

[32] オセアニア／メラネシア民族誌において「テリトリー」の概念は、親族集団との結び付きにおいて規定された土地を指すものとして、ある程度一般的に用いられてきた[e.g. Keesing 1982b; Reuter 2006]。なお、マライタ島南部に住むラウ／アシの移住史や空間認識を論じた竹川[2002]は、本稿における（非）テリトリー性への関心を部分的に共有している。

[33] 先に見た事例 4 は、S 氏族による Foubaekwa の土地の慣習的所有を物語的に正統化するものとして、ここでいう（非）テリトリー性に関し、他の事例とは異質と見るべきと思われる。なお、アシの移住伝承を、土地ではなく海面の漸進的なテリトリー化を語るものとする見方は、おそらく妥当でない。というのも、アシの氏族によって所有される海面すなわち漁場（*alata*

上で一連の事例に見たように、アシの伝承は、異なる氏族や居住集団の間、あるいは「アシ／トロ」の間の社会的・集団的境界の画定を物語るものではまったくなく、それどころかむしろ、そうした境界が雑多で偶有的な媒介によって乗り越えられることで、海上居住と「アシ」というアイデンティティが拡大あるいは伝染していく過程を語るものであった。こうした集団性は、メラネシアの他地域の「トポジェニー」にしばしば読み取られる上記のような性質との対比において、非テリトリー的と形容されうるものと思われる。

なお、メラネシア地域に関しては、先にも触れた通り、アシの人工島にも認められる居住集団の非単系的な構成パターンがたびたび指摘されてきた。そうした議論はしばしば、非単系的な関係を「共同体的」な規範と同一視し、時にはそれをさらに、植民地主義によって導入されたという「西洋的」な「個人主義的」原理と対比してきた[e.g. McDougall 2005]。これに対し、親族間の対立などによる居住集団の不断の分裂・再構成として語られるアシの集団性は、「共同体的」という規定には決して適合しえず、むしろ「共同体／個人」といった図式を離れた考察を要請しているように思われる。

２　移住と「社会統合」

メラネシアのいくつかの地域からはまた、上で見たようなアシの事例と一見類似した、異なる「起源」をもつ人々の、移住を通じた合流と新たな集団の形成を物語る神話・伝承が報告されている。たとえばニューギニアのビミン＝クスクスミン Bimin-Kuskusmin に関してプールが報告しているそうした伝承[Poole 1994]は、しかし他面において、移住の結果として成立する集団が、しばしば強い意味で「統合」され「全体化」された集団として概念化されている点で、そうした全体性をあくまで示さないアシの「トポジェニー」とは異質と思われる[34]。

このことは、本章での第二の論点として、メラネシアにおける移住を記述・分析する上での「社会統合 social integration」という視点の問題をも示唆する。メラネシア人類学における移住論はしばしば、人の移動への注目を通じて、人類学における伝統的な「社会」観、すなわち固定的な境界をもった「地域集団 local group」としての「社会」の概念を相対化するというねらいを掲げてきた。間歇的に繰り返される集団的移住に注目し、ニューギニア高地における「社会」を「組織された流れ organized flow」として概念化しなおす

または単に *asi*）には、所有氏族の成員も含めあらゆる個人が漁撈を禁じられる／許される *abu/mola* という二値的な規定しか存在しない[Akimichi 1991]。アシにおける海面の所有は、少なくとも一面で、氏族集団のテリトリーというコードから独立しているのである。

[34] たとえばビミン＝クスクスミンにおいて、異なる「起源」をもつ人々は、半族組織として構造化されることで、移住の結果として新たに成立した社会的全体性へと「統合」されたものとして語られる[Poole 1994: 192-197]。これに対し、Ⅲ・Ⅳ章での検討から明らかなように、アシの移住伝承に「構造化された全体としての『アシ社会』」といった観念を見出すことはできない。この点については、注 15 におけるマライタ島のクワラアエの事例との対比をも参照。

ことを提唱したワトソンの論文[Watson 1970]は、その古典的な例である[35]。その反面でこれらの議論は、移住という現象に対し、メラネシア民族誌を一面で規定してきた「社会統合」論の枠組み、すなわち、「多くの場合単系的な出自原理や安定的な政治的権威を欠くこの地域の社会集団が、どのようにして一定の秩序・統合を維持しているのか」という構造＝機能主義的な視点をしばしば適用してきた[36]。そしてそうすることで、自ら掲げたねらいに反し、それ以前の人類学における「地域集団」観とも共通する、「単一の全体として統合された社会」という見方を再生産してしまっていたように見えるのである。

たとえば、上述の論文においてワトソンが行っているのは、「地域集団」の水準における、「人々が不断に移住しているにもかかわらず、これらの社会はなぜ秩序・統合を実現しているのか」という「問題」を、新たに導入された、分析上より上位とされる水準、すなわち諸「地域集団」を広域的に包摂する「組織された流れ」という水準において、「人々が不断に移住しているからこそ、この社会は統合されているのだ」というかたちで「解決」するという理論的操作に他ならない[37]。このような操作において、古典的な「統合された全体としての社会」の概念は、移住現象への注目によって相対化されるどころか、一面ではむしろ、それまでよりもより高度な説明能力、すなわちこれまでは「秩序の不在」であった状況を、分析的に上位の水準において「秩序の実現」として記述可能にする能力をもつものとして再強化されているといえる。

これに対し、アシの移住伝承に語られる、雑多な媒介によって既存の集団的境界がつねに相対化される過程を記述・分析する上では、「社会統合」論を特徴付ける社会的全体性についての想定はあくまで不適合なものにとどまる。この点でアシの事例は、先に見た「移動を通じたテリトリー的集団の構成」という図式のみならず、メラネシア人類学における移住論を時に規定してきた「社会統合」という構造＝機能主義的な枠組みにも回収しがたい移住と集団性の関係を示しているように思われるのである。そうしたものとしてそれは、メラネシア人類学における「社会」概念を理論的に再考するための民族誌的手がかりとなる可能性をも示唆しているといえるだろう[38]。

---

[35] より最近では、ニューギニアにおける移住や交易関係を主題とする A. ストラザーンとシュテュルツェンホーフェッカーによる論集[Strathern and Stürzenhofecker 1994]に、同様な主張が見られる。

[36] 同様な「社会統合」論の視点は、メラネシア人類学における交換・交易論をもしばしば規定してきた。たとえばマライタ島北部についても、バエグ語地域で調査を行ったロスによって、「トロ／アシ」の間の市場交易ネットワークがこの地域の諸集団をどのように「統合」しているかという、端的に構造＝機能主義的な分析が提示されている[Ross 1978]。

[37] 同様な操作は、ニューギニアにおける移住や集団間関係の分析の尺度を、「地域集団」から「広域的ネットワーク regional network」へと移行させるという A. ストラザーンらの主張にも読み取ることができる[Strathern and Stürzenhofecker 1994]。

[38] このような方向性はたとえば、M. ストラザーンによる、メラネシア人類学における「社会」概念の徹底した批判・再構成[Strathern 1988; Strathern 2004(1991)]や、ドゥルーズ哲学に依拠して人類学的交換論および「社会」概念を書き換えようとするヴィヴェイロス・デ・カスト

Ⅵ　おわりに

アシの移住伝承に以上で読み取ったような集団的アイデンティティの独自のあり方は、決して単に理論的・分析的な事実にとどまるものではない。

Ⅱ章で指摘したように、今日のマライタ島北部では、土地不足や国内紛争をめぐる不安の下、「アシ」というアイデンティティそれ自体が潜在的に不安定化している状況が認められる。こうした現状と、以上で見たような移住とアイデンティティ形成の運動の間には、一定の屈折――というのも、人々は現在、人工島と「アシ」アイデンティティの双方から遠ざかろうとしているのだから――とともに、ある種の連続性が示されているように思われる。すなわち、「アシ」として「海に住む」ということはこれまで、以上で示されたような、集団的アイデンティティにおける変化・生成の運動として継続されてきた。そうであるならば、アシの人々は今日、いわゆるポストコロニアル状況においてマライタ島／ソロモン諸島が通過しつつある諸変化をも、そうした集団的アイデンティティの、複雑に屈折しつつ持続する運動として経験しているのではないか――本稿での以上の検討は、アシの現状に対するこのような見方を示唆するものと思われる。

たとえば、先に見た事例 7 は、クリケットというすぐれて植民地主義的といえる形象に言及することで、間接的な仕方においてであれ、個別の人工島の創設というエピソードの内部に、19 世紀後半以降のマライタ島北部における歴史的体験を書き込むものとなっていた。「アシ」アイデンティティと人工島居住をめぐる「トポジェニー」が、一面でこのように、アシの人々における歴史や社会変化の体験についての語りをもなしているとすれば、「アシ」として「海に住む」ことのゆらぎと「トロ」への再移住についての現代の語りは、この人々が経験しつつあるどのような変化について語っているのか。また、アシの移住伝承に語られる、氏族や「アシ／トロ」の境界を不断に乗り越え、離合集散を繰り返しながら人々が新たな人工島を創設していく過程は、時に現代メラネシアの都市コミュニティの様子をも連想させ、驚くほど「近代的」な印象を与える[39]。そうであるとすれば、「アシ」アイデンティティをめぐる現在の動きには、今日のメラネシア島嶼世界において、分析者によって時に「近代性」と呼ばれるものを人々が生きる上での、ある種の不安や困難が表現されているとも考えられるのではないか。

これらの問いに、過去における移住史やアイデンティティの変容を今日において具現化

ロの議論[Viveiros de Castro 2010]とも接続可能と思われる。

[39] この点を関根久雄氏は、「アシ」アイデンティティと、現代ソロモン諸島の都市居住者アイデンティティ――具体的には、首都ホニアラにおける――の類似性として指摘された。なお実際、T 村のような大規模なアシの集住地を、近隣のトロの人々――あるいは時に、アシの人々自身――は、しばしば「まるで町 *taoni*〔town の訛り〕のようだ」と形容してみせる。このことは、前章で指摘したような「アシ」アイデンティティの特質を、マライタ島北部の人々自身がある種「都市的」、さらには「近代的」なものと認識していることを示唆するものと思われる。

する人工島群という景観の体験や、本稿ではさしあたり不問とした、移住伝承を含む伝統的知識あるいは「カストム」が現在語られ経験される仕方にともなう問題性といった視点から、より多角的に取り組むことは、今後のアシ民族誌における重要な課題である。本稿での考察は、こうしたより包括的な研究のための前提をなすものに他ならない。

謝辞

本稿は、財団法人トヨタ財団の 2007 年度研究助成（助成番号：D07-R-0157）の成果の一部である。また、以上の内容は、日本文化人類学会第 44 回研究大会（2010 年 6 月 12 日、於：立教大学新座キャンパス）での報告「メラネシア地域における移住の過去と現在——ソロモン諸島マライタ島北部の「海の民」ラウとその人工島居住の事例に即して」に部分的に基づいている。本稿執筆に際しては、関根久雄・筑波大学大学院教授の他、岡本年正、深田淳太郎、丹羽充の各氏から貴重なご意見、ご教示を賜った。ここに記して感謝したい。

参照文献

秋道　智彌

1976　「漁撈活動と魚の生態——ソロモン諸島マライタ島の事例」『季刊人類学』7(2): 76-131。

Akimichi, Tomoya

1991　Sea tenure and its transformation in the Lau of north Malaita. *South Pacific Study* 12(1): 7-22.

Bonnemaison, Joël

1985　The Tree and the Canoe: Roots and Mobility in Vanuatu Societies. *Pacific Viewpoint* 26: 30-62.

Burt, Ben

1982　Kastom, Christianity and the First Ancestor of the Kwara'ae of Malaita. *Mankind* 13(4): 374-399.

Eves, Richard

1997　Seating the Place: Tropes of Body, Movement and Space for the People of Lelet Plateau, New Ireland (Papua New Guinea). In J. J. Fox (ed.), 1997, pp. 174-196.

Fox, Charles E.

1974　*Lau Dictionary*. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.

Fox, James J.

1997　Place and Landscape in Comparative Austronesian Perspective. In *The Poetic Power of Place: Comparative Perspectives on Austronesian Ideas of Locality*. James J. Fox (ed.), pp. 1-21. Canberra: Department of Anthropology, Australian National University.

Ivens, Walter G.

1978(1930)　*The Island Builders of the Pacific*. New York, NY: AMS Press.

Keesing, Roger M.

1982a　Kastom and Anticolonialism on Malaita: 'Culture' as Political Symbol. *Mankind* 13(4): 357-373.

1982b　*Kwaio Religion: The Living and the Dead in a Solomon Island Society*. New York, NY: Columbia University Press.

1985　Killers, Big Men, and Priests on Malaita: Reflections on a Melanesian Troika System. *Ethnology* 24(4): 237-252.

1992　*Custom and Confrontation: The Kwaio Struggle for Cultural Autonomy*.　Chicago, IL: University of Chicago Press.

Köngäs Maranda, Elli

1975　Lau Narrative Genres. *The Journal of the Polynesian Society* 84(4):485-491.

Maranda, Pierre and Elli Köngäs Maranda

1970　La Crâne et l'utérus: deux théorèmes Nord-Malaitans. In *Échanges et communications. Mélanges offerts à Claude Lévi-Strauss à l'occasion de son 60ème anniversaire*. Jean Pouillon and Pierre Maranda (eds.), pp. 829-861. Paris: Mouton.

Maranda, Pierre

2001　Mapping Cultural Transformation through the Canonical Formula: The Pagan versus Christian Ontological Status of Women among the Lau People of Malaita,Solomon Islands. In *The Double Twist: From Ethnography to Morphodynamics*. Pierre Maranda (ed.), pp. 97-120. Toronto: University of Toronto Press.

McDougall, Debra

2005　The Unintended Consequences of Clarification: Development, Disputing, and the Dynamics of Community in Ranongga, Solomon Islands. *Ethnohistory* 52(1): 81-109.

宮内　泰介

2003　「『自分たちの土地へ』――現代メラネシア社会における移住・民族紛争・土地所

有」『現代社会学における歴史と批判　上――グローバル化の社会学』武川正吾・山田信行（編）、pp. 133-158、東信堂。

Mondragón, Carlos

2009　A Weft of Nexus: Changing Notions of Space and Geographical Identity in Vanuatu, Oceania. In *Boundless Worlds: An Anthropological Approach to Movement*. Peter Wynn Kirby (ed.), pp. 115-133. New York, NY: Berghahn Books.

Pannel, Sandra

1996　Histories of Diversity, Hierarchies of Unity: The Politics of Origins in a South-West Moluccan Village.　In *Origins, Ancestry and Alliance: Explorations in Austronesian Ethnography*. James J. Fox and Clifford Sather (eds.), pp. 216-236. Canberra: Department of Anthropology, Australian National University.

Parsonson, G. S.

1966　Artificial Islands in Melanesia: The Role of Malaria in the Settlement of the Southwest Pacific. *New Zealand Geographer* 22(1): 1-21.

Poole, Fitz John Porter

1994　Ethnohistorical and Mythological Traditions of Places of Origin, Paths of Migration, and Formations of Communities Among the Bimin-Kuskusmin, West Sepik (Sandaun) Province, Papua New Guinea. In A. Strathern and G. Stürzenhofecker (eds.), 1994, pp. 179-208.

Reuter, Thomas (ed.)

2006　*Sharing the Earth, Dividing the Land: Land and Territory in the Austronesian World*. Canberra: Department of Anthropology, Australian National University.

Ross, Harold M.

1973　*Baegu: Social and Ecological Organization in Malaita, Solomon Islands*. Urbana, IL: University of Illinois Press.

1978　Baegu Markets, Areal Integration, and Economic Efficiency in Malaita, Solomon Islands. *Ethnology* 17(2): 119-138.

Rumsey, Allan and James F. Weiner (eds.)

2001　*Emplaced Myth: Space, Narrative, and Knowledge in Aboriginal Australia and Papua New Guinea*. Honolulu, HI: University of Hawai'i Press.

里見　龍樹

2010　「現代メラネシアの「海の民」における居住と移住――ソロモン諸島マライタ島北部のラウ／アシとその人工島をめぐって」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』97: 1-11。

Scott, Michael W.

2007　*The Severed Snake: Matrilineages, Making Place, and a Melanesian Christianity in Southeast Solomon Islands*. Durham, NC: Carolina Academic Press.

Silverman, Eric Kline

2001　From Totemic Space to Cyberspace: Transformations in Sepik River and Aboriginal Australian Myth, Knowledge, and Art. In A. Rumsey and J. Weiner (eds.), 2001, pp. 189-214.

Statistics Office

c.2000　*Reports on 1999 Population and Housing Census*. Honiara: Statistics Office.

Strathern, Andrew and Gabriele Stürzenhofecker (eds.)

1994　*Migration and Transformations: Regional Perspectives on New Guinea*. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh Press.

Strathern, Marilyn

1988　*The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. Berkeley, CA: University of California Press.

2004(1991)　*Partial Connections*. Walnut Creek, CA: Altamira Press.

竹川　大介

2002　「結節点地図と領域面地図、メラネシア海洋民の認知地図――ソロモン諸島マライタ島の事例から」『講座・生態人類学 5　核としての周辺』松井健（編）、pp. 159-193、京都大学学術出版会。

Tryon, Darrell and Brian Hackman

1983　*Solomon Islands Languages: An Internal Classification*. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.

Viveiros de Castro, Eduardo

2010　Intensive Filiation and Demonic Alliance. In *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*. Casper Bruun Jensen and Kjetil Rödje (eds.), pp. 219-253. New York, NY: Berghahn.

Wagner, Roy

1974　Are There Social Groups in the New Guinea Highlands? In *Frontiers of Anthropology*. Murray J. Leaf (ed.), pp. 95-122. New York, NY: D. Van Nostrand.

Wassman, Jürg

2001　The Politics of Religious Secrecy. In A. Rumsey and J. Weiner (eds.), 2001, pp. 43-70.

Watson, James B.

1970　Society as Organized Flow: the Tairora Case. *Southwestern Journal of Anthropology* 26(2): 107-124.

（2011 年 4 月 11 日採択決定）